

# 西日本における草原生植物リスト（試案）の作成 ～草原生態系の健全性を指標する種の定義～

自然・環境再生研究部 生物資源研究グループ

橋本佳延



現在の日本には、ススキやチガヤ、シバなどのイネ科草本が優占する草原が国土の1%程度しか残っていません。これら草原の多くは、火入れや刈り取り、放牧といった管理・利用によって保たれていますが、近年は管理・利用が少なくなり、草原そのものの面積が減少傾向にあります。また、草原内で特定の種が過密に生育するようになったり、森林に移り変わったりして質もかつてとは異なるものへと変化つつあります。その結果、草原本来の生物多様性が失われていると指摘されています。

このような状況を正確に知るためには、草原を特徴づける種（草原生植物）の分布の有無や多寡を指標とすることが有効です。しかし草原生植物の定義は調査者・研究者によって様々であり統一的な見解がありません。

そこで2019年にこの場で紹介した研究内容を精査し、「何をもって草原生と見なすか？」を定義し、草原生の判定基準の案を作成しました。この基準に従い、島嶼部を除く西日本に分布する植物（208科3826種）を判定したところ、76科579種が草原生植物と判定されました。これらの草原生植物の絶滅危惧の状況を調べたところ、その**18.7%が環境省レッドリストで絶滅危惧種・準絶滅危惧種に指定**されていました。**兵庫県では453種の草原生植物が確認され、そのうち30.9%が兵庫県版レッドリストで絶滅危惧種に指定**されていました。

草原生植物リストを含む本研究の成果は、当館紀要「人と自然」に投稿し、受理されました。2023年度発行が予定されています。当館HPでも公開されますので、是非ご注目ください。

